

年五和令
日五一月一
号四 第會統正本日
社聞新統正

正 統

聞新るす克超を代近

正 統

満山頭と籍漢

日本のいはゆる「近代」では、日本の社会に西洋的近代を当てはめすぎたきらひも見受けられます。

「文明開化」とはまつたく日本の文明が、それまでなかつたかのやうなお話して、当時の攘夷派志士たちが西洋人に対し敵意を持つたのもうなづけます。

眞の文明とは、たゞへ文明が劣つた国があつたとしても紳士的にこれを重んじ礼を尽くして交流を行ひ、求められれば方法や技術、そして文化を交へてゆく。さういふものだと筆者は考へます。

残念なことに日本は東洋のイギリスをめざし、日本の道理を捨ててしまつた感が否めません。

台湾や朝鮮においての植民政策も、最初に日本が植民政策を行つた台湾では新渡戸稻造などの武道的基督教精神が功を奏し、それには民俗学者の伊能嘉矩の献身的な研究、何よりも後藤新平の英智と、それがひとつとなり、この岩手県出身の三賢人の精神は日本と台湾をなんとか明るく照らしてゐると思はれます。

台湾の植民政策の後半期は原敬が手がけてゆきますが、これは前半期とは大きく異なり、帝国主義

日本のいはゆる「近代」では、日本の社会に西洋的近代を当てはめすぎたきらひも見受けられます。

「文明開化」とはまつたく日本の文明が、それまでなかつたかのやうなお話して、当時の攘夷派志士たちが西洋人に対し敵意を持つたのもうなづけます。

眞の文明とは、たゞへ文明が劣つた国があつたとしても紳士的にこれを重んじ礼を尽くして交流を行ひ、求められれば方法や技術、そして文化を交へてゆく。さういふものだと筆者は考へます。

残念なことに日本は東洋のイギリスをめざし、日本の道理を捨ててしまつた感が否めません。

台湾や朝鮮においての植民政策も、最初に日本が植民政策を行つた台湾では新渡戸稻造などの武道的基督教精神が功を奏し、それには民俗学者の伊能嘉矩の献身的な研究、何よりも後藤新平の英智と、それがひとつとなり、この岩手県出身の三賢人の精神は日本と台湾をなんとか明るく照らしてゐると思はれます。

日本の社会に西洋的近代を当てはめすぎたきらひも見受けられます。

「文明開化」とはまつたく日本の文明が、それまでなかつたかのやうなお話して、当時の攘夷派志士たちが西洋人に対し敵意を持つたのもうなづけます。

眞の文明とは、たゞへ文明が劣つた国があつたとしても紳士的にこれを重んじ礼を尽くして交流を行ひ、求められれば方法や技術、そして文化を交へてゆく。さういふものだと筆者は考へます。

残念なことに日本は東洋のイギリスをめざし、日本の道理を捨ててしまつた感が否めません。

台湾や朝鮮においての植民政策も、最初に日本が植民政策を行つた台湾では新渡戸稻造などの武道的基督教精神が功を奏し、それには民俗学者の伊能嘉矩の献身的な研究、何よりも後藤新平の英智と、それがひとつとなり、この岩手県出身の三賢人の精神は日本と台湾をなんとか明るく照らしてゐると思はれます。

もじく

漢籍と頭山満
向精神薬と現代の闇 ①
漢方薬の視点からの向精神薬とは
映画「隠れた敵」を観て
内藤湖南と近代中国

塚本 保嗣
(一面)

唐仁原直子
(二面)

栗田 雅人
(三面)

塚本 保嗣
(四面)

郵便番号 八一三の〇〇六二
福岡県福岡市東区松島三の九の十五
電話番号 ○九二(二九二)九六七七番
編集長 塚本保嗣

発行所 正統新聞社『正統』編集部

古来、日本人は東洋の古典を読むことにより、己を磨き、高めました。一言で東洋の古典といひました。その数は膨大なものになります。その中でも、特に代表的な九つの經典を総称して「四書五経」といひます。

西八郎為朝に憧れてハ郎と改名した時期も。

福岡藩の西新生まれの幕末の蘭

学者・瀧田悠吉(号は紫城)は、

頭山や金子賢太郎(明治憲法の草

案策定や日露戦争の講和のアメリ

カでの下交渉で活躍)、栗野慎一

十四歳の時に太宰府天満宮に参

拝し思ふところあつて天満宮の満

入塾したばかりの頭山も、それ

らの荒くれ者どもの洗礼を受ける

ことになります。

李達とは中国の『水滸伝』に登

場する人物ですが、とてつ

もない暴れ者で人を殺すことなどな

りも思はず、黒旋風李達とも呼

ばれました。興志塾にはこの黒旋

風李達とも呼ばれる男がゐて、名

を奈良原至(以下奈良原と記す)

から百年の後も恨まれるであら

う」といふ言葉を残してゐますが、

その通りになつたわけです。

筆者は機会があるたびに、大東

内田良平も日韓併合には大反対で

した。そして日韓併合後は、日本

に朝鮮への善政をうながすための

民間組織「同光会」を立ち上げて

責任を全うしようとした。内

田は「このままいけば日本は朝鮮

に朝鮮への善政をうながすための

民間組織「同光会」を立ち上げて

責任を全うしようとした。内

田は「このままいけば

内藤湖南と近代中国

瓦解する東洋の概念

筆者が「戦後保守は終はつてゐる」と感じたひどつに、保守陣営の論客たちが「犯罪行為」「テロ」「法律に違反」などの言葉を頻繁に使ひ出したことによる。

自らと同じくせむとした某集団までが同じやうな感覚で騒ぎ、志などどうに忘れた議員どもが自己の宣伝のためにこれら集会に顔を出す始末。

日本の伝統や文化といひながら、国語改革などには微塵の関心もなく知識もない。挙げ句の果ては西洋的に近代化された以降の日本しか知らずに、左翼のカウンター・パートを官製愛國主義で挑む哀れな戦後保守。

さて、報道などで「某国で石打ちの刑とは「下半身を生き埋めにして、身動きが取れない状態の罪人に對し、大勢の者が投石を行ひ死も最も苦痛が多いとされる。罪人が即死しないやう、握り拳程度の大さの石打ち用の特別な石を山盛りに準備しておく」とあり、最近ではアフガニスタンやイラク、イスラム国などが当てはまる。

また世界には、文明を受け付けず、島に侵入しようとする人間は次々に殺されるといふ地域もあるやうだ。

一般的な人々はこれを「非文明的な行為」とあざけるだらう。

しかし筆者はその非文明的な團の中にも、長い間培はれた民族の魂をわづかなく感じてゐる。日本も明治御一新以後に「文明

開化」と呼ばれる日本国民の生活に変化をもたらされた時期があつた。

「文明開化」とは、それまで日本に文明がなかつたかのやうな言葉で、全く無礼で侮辱的な言葉であるが、要はこれも中華思想と同じで、西洋列強も帝国にひれ伏して与しない国は蛮族であり、文明人とはいへないといふ考へなのであらう。帝国の本質は東西變はる事はない。

さうして同じ東洋の中国から日本は少なからず影響を受けてきた。現在、日本に対し中国共产党が侵略的な行為や内政干渉を繰り返してゐることに怒りは感じて当然であるが、だからといって東洋の思想の一部である中国の古典などを軽視するべきではないと筆者は考へてゐる。政治と思想は分けて考へなければならない。

在日ウイグル人のトウールムハメット農学博士曰く「戦前の日本レベルであつた」「しかし、戦後日本の中国研究は素晴らしい」とある。

特に湖南は富永を「第一流の天才」と賞賛する。湖南曰く「(富永だけが)論理的基礎の上に研究の方法を組み立てる方法に成功した人物」であるといふ。

一方の山片蟠桃についてはその主著『夢の代』は「学問のはうからも知識も得らるれば、実際の知識も得られる(百科事典みたいなもの)」としてこれを評価してゐる。

湖南は大正十年に「応仁の乱について」と題する講演を行つてゐる。これは『東洋文化史』に収録されてゐるが、その一部を紹介したい。

「だいたい今日の日本を知るために日本の歴史を研究するには、古代の歴史を研究する必要はほとんどありませぬ。応仁の乱以後の歴史を知つておつたらそれでたくさ

都帝国大学文科大学史学科東洋史学講座の講師となる。湖南の处女作『近世文学史論』は明治三十年に刊行され(ここでは江戸文化の元は上方文化の移入により、三百年といふ時間をかけながら完成されたものだと説く)。

実は明治三十年における江戸は文字通り「近世」であつたことを認識せねばならない。現在の私どもが江戸時代を見る感覺と湖南が江戸を観た距離感は全く違ふ。

ここで湖南のいふ「文化」とは、

学問であり、学問の中心はどこにあり、なぜさうなつたかといふ方針論や技術論に対する論考である。湖南は上方の学者である富永仲基や山片蟠桃に注目し、賞賛したものではない。

湖南は日本と中国を東洋文化といふ価値観でひとつにまとめてゐた。つまり、日本の文化は中国文化の一大転換といふ考へは、東京化の波及した結果であると考へてゐた。

湖南は日本と中国を東洋文化といたして、最初に漢籍を徹底的に学び、その上に日本学を構築していく。その漢籍と日本学が湖南の内部で時間を経て東洋学となつてゐたのである。

湖南は中国の学者で富永と同じくらゐに絶賛した学者がゐた。彼は名を章学誠といひ、浙江省紹興の出身で科挙の試験には合格したが官には仕へず生涯を在野で過ごしたいはば富永と同じ「町人学者」であつた(章は山片と同時代に生きた)。

湖南が章学誠を評価したのは、

その学問の構築の方法であった。それは現代では科学的人文学ではあります。湖南は考証学といふものを重んじたが、湖南は考証学といふものを校正者によらない理論的考証を自己により行ふことを最上としたのである。章もその実践者であつた。

湖南が章学誠を評価したのは、その学問の構築の方法であった。それは現代では科学的人文学ではあります。湖南は考証学といふものを重んじたが、湖南は考証学といふものを校正者によらない理論的考証を自己により行ふことを最上としたのである。章もその実践者であつた。

湖南は中国の構築に詳しく述べるが、湖南は考証学といふものを校正者によらない理論的考証を自己により行ふことを最上としたのである。章もその実践者であつた。

湖南は中国の構築に詳しく述べるが、湖南は考証学といふものを校正者によらない理論的考証を自己により行ふことを最上としたのである。章もその実践者であつた。

湖南は中国の構築に詳しく述べるが、湖南は考証学といふものを校正者によらない理論的考証を自己により行ふことを最上としたのである。章もその実践者であつた。

湖南は中国の構築に詳しく述べるが、湖南は考証学といふものを校正者によらない理論的考証を自己により行ふことを最上としたのである。章もその実践者であつた。